

中国八日間の旅

横浜善光寺留学僧育英会常務理事
龍光寺住職 佐藤俊明

上海 六月十五日

李幼麟さんは上海の復旦大学を卒業、良寛研究のため来日して駒沢大学に留学し、善光寺留学僧第三期生となった異色の人材である。この李さんの案内で今回の中国訪問が企画された。

六月十五日朝、理事長と常務理事の私、そして李さんの三名は成田空港第二ターミナルで合流し、十時二十五分離陸、三時間のフライトで現地時間十二時三十分上海空港に着陸した。

飛行機を降りてボーデング・ブリッジに足を踏み入れると、強烈なジャスミンの香りの歓迎を受けた。その瞬間、私の脳裡の映像画面の中に、ちょうど親画面の中に子画面が浮かんだように五十年前の上海の街の姿がインプットされた。

今日只今の上海、そして五十年前の上海、新旧二つの上海の姿を同時に視聴することができたら——、そんな期待をもって入国手続を済ませてロビーに出ると中国旅行社の人々が出迎え

てくれた。予想以上に順調に事が運んで呆気ない感じ。いや、失礼、中国は変わったんだゾ!!と自分に言い聞かせた。

空港の建物には「オリンピックを誘致しよう」と大書された大きな横書きの額が掲げられ、オリンピックを屈指し、これを跳躍台としてさらに前進しようとする中国の熱い息吹が感じられた。

空港からホテルまでの道の両側には当然のことながら近代ビルが林立しており、また続々建築中である。上海はドンドン変っている、う思っていると、懐しいことに租界や住宅街は昔のままの面影をとどめている。住宅改造まではまだ手がまわらないのかと思つたがどうもそれだけではなさそうだ。

「私は五十年前、約半年ぐらい上海におりましたが、南京東路にだつたらうか、『大光明』という映画館とか、その近くに『永安公司』とい

うデパートなどあつたものですが、いまだうつてます?」

と李さんに訊ねると、李さんは、

「そのまま残つてます。もつとも『永安公司』は二年ほど前に、外資がはいつて『華联商厦』に名前は変わりましたが、建物はそのままです」と、答えてくれた。

南京東路といえば東京の銀座通りのような繁華街である。その街を代表するような建物が五十年前も前の姿をそのままとどめているとは、日本ではちよつと想像しがたいことである。建物だけのことはなかった。私が南京におつた頃、上海、南京を中心に『薔薇薔薇処々開』ではじまる軽快なメロデーの歌が大流行していた。私は懐しさの余り、飛行機の中で、ノートに、

薔薇、薔薇、処々開チヤンウェイ、チヤンウェイ、ツイツツカイ(ばら、ばら、どこ

にも咲く)

青春、青春、処々在チンチュン、チンチュン、ツイツツツツカイ(青春、青春、どこ

にもある)

と、五十年前の思い出を辿って、ここまで書いた。

さて、クルマの中でノートを取り出し、気付いたことをメモしようとしてノートを開いたところ、脇にすわっていた張莉チャンリさんが目敏くそれを見つけ、

「先生！薔薇の歌、知ってるんですか？」と、頓狂な声をあげた。それ以上に驚いたのは私のほうで、

「へー、五十年前の歌、あなた知ってるの？、これからさき書いて頂戴！」

と書いて手帳を渡すと、二十三歳の彼女は次のように書いてくれた。

挡不住的春風吹進胸懷タシブチユデシユンフオンチユイチンシユンホワイ (春風はそよそ

よと胸の中に吹き込む)

薔薇チャンウエイ、薔薇チャンウエイ、処々開ツーツツカイ(ばら、ばら、どこにも咲く)

「いや、有難う。二番、三番もわかる？」

「家に帰ればわかりますから、手紙で送ります」

「頼む：」ということで話題をかえたのだが、帰国した翌日、張さんから、歌詞を書いたファックスが送られて来た。折角なので載せたいのだが、紙面の都合で割愛することにして、「謝々シェンシェ、張莉小姐シヤオジエ！」でご免。

上海には新と旧が仲よく同居している。上海だけではなく、中国全体がそうなのだろう。その中国が、社会主義国家に変身したのはどういうわけなのだろう。その疑問は残るが、今日は二つの体制が共存しており、今後ますます協調を深めることであろうし、中国だから可能であろう。

日本は進歩の名のもとに、古いものは惜し気もなく捨て去ってしまう。これはまた性急で勿体ないことだが、反面素晴らしいものを生み出

す原動力にもなっている。今回中国に来て特に感じたのは仮名の威力である。漢字文化に学び、漢字を超えて仮名をつくり出したことは実に素晴らしい。今日中国では簡略漢字を使っているが到底仮名の比ではない。試みに次に掲げる文字を何と読むか、チャレンジしていただきたい。

- 1、洛山幾
- 2、旧金山
- 3、雪妮

これは外国の都市名である。次に街頭でみた看板の文字を拾ってみると、

- 4、時装表演
- 5、雪碧
- 6、彩色胶卷

(この六問の答えは64頁にあります。)

なんと不便なことであろう。傑作なのは「卡拉OK」である。漢字で表現し切れなかったわけではないだろうし、なかなかユニークな発想だと思う。この言葉は「カラオケ」と読むのである。

その昔、仏教経典が中国語に翻訳された時、

たとえば『般若心経』のように、梵語(般若)と漢語(心経)を兼挙して一つの言葉を作った。これを「梵漢兼挙」というのだが、その際は梵語はその音を写して漢字で書かれているが、「卡拉OK」の場合は「漢英兼挙」ならぬ「漢英兼用」である。

李さんや張さんに矢継ぎばやに質問を浴びせて耳目をたのしませているうち、クルマはもう新錦江飯店に到着した。「飯店」といつてもめし屋ではなく、ホテルのことである。

早速旅装を解き、改良衣に着換えて玉仏寺参拝に向かう。

玉仏寺はその名のとおり、玉ぎよくで出来た仏を祀る寺である。辞書を見ると、玉とは宝石。珠に對して、美しい石をいう。硬玉・軟玉の併称。白玉・翡翠・黄玉の類……とある。ここの玉仏は翡翠造りで、今から約百年前慧根法師がビル



宋山青蓮年賦天

マから持ち帰ったものとか。艶かしくもあでやかな玉仏は身の丈が一・九メートル、秀麗な火焰舟型光背の前に結跏趺坐するこの碧玉仏は重さ一・五トンという一玉造りで有名。昔から華僑の信仰を集めてきた。文化大革命の際は周恩来首相の尽力により、紅衛兵の破壊から免れ得たという。杭州の靈隱寺の場合もそうだが、周恩来首相は数多くの有名寺院を破壊から護ってくれた大恩人である。

市の中心部に近く、商店街や民家に囲まれて立つ黄色の山門をくぐると、堂塔伽藍が整然と建ち並び、その威容に眼をみはる思いがする。

李さんを通して事前に連絡をとっていたので、慧云知客和尚が待機しておってくれた。

彼は大学を出たばかりとか、実に能弁で諸堂案内をしてくれた。

十三年前天童寺を参拝したときは、あの大寺に僧侶はわずか二十三人しかいなかったし、い

ずれもみな老齢で、当時は若い僧侶の姿はどこにも見られなかった。それがいま、若い僧侶が先頭に立っている。まことに望ましいことであり、聞けば一山の僧侶は百五十人、僧俗併せて六百五十人を擁するという。施餓鬼法要の掲示が堂内いたるところに貼付され、法要は毎日おこなわれている様子で参詣客でにぎわっている。法要収入だけでも相当高額にのぼることであろう。さすがは玉仏寺の感を深くした。

龍華寺も参拝したいところだったが、来客を迎える約束の時間も迫ってきたので割愛してホテルに戻ることにした。

しかしここで「龍華」^{りゅうわ}について一言しておきたい。中国寺院の典型的スタイルは、四天王殿、大雄宝殿、舍利殿、方丈を主たる建物として回廊がついている。四天王殿の中央には布袋様が、その裏には韋馱天様が祀られてある。布袋は九世紀末実在した禅僧といわれ、肥満した容貌が

福々しく、いつも半裸で杖をつき、大きな袋をかつき托鉢して歩いたので人々は布袋和尚と呼んだ。人の吉凶や時の晴雨を予知して当らざることとはなかったという。世人、弥勒菩薩の化身となし、その像を描き、または刻して尊崇したという。どこへ行っても布袋様の姿に会うことの多いことをみると、中国の人たちには弥勒信仰が非常に強いように推測される。現に二日後に訪れた杭州の浄慈寺で晩課に誦誦されていたお経は『弥勒経』だったし、また「龍華」という名も弥勒信仰に由来するものである。

弥勒菩薩は梵語でマイトレーヤといい、慈氏菩薩（慈悲の権化）と訳されている。いま天上界の兜率天とすてんにおられるが、お釈迦様入滅五十六億七千万年の後、この娑婆世界に降りて来られ「下生げしやう」という、龍華樹のもとで弥勒如来となり、そこで三回説法なさる。この説法で娑婆世界の者は残らず成仏する。これを「龍華三会りゅうげさんかい」

の説法せつぽう」というのであって、この説法はまだまだかつて聞いたことのないほどの素晴らしい説法で、これを聞いたらいかなる悪人も成仏するといふのである。それで後世待ちこがれる説法を「龍華三会の説法を待つ思い」といい、また、有難く感激した説法を「龍華三会の説法を聞いたような」ともいふのである。「龍華寺」とはそういうした思いを込めて命名された寺名であろう。

李さんの先輩であると同時にごく親しい間柄にある王生洪氏は上海人民政府の教育衛生の最高責任者であり、上海市の高等教育局長と教育国際交流協会の会長を兼ねた上海市の高官である。宗教局長を伴ってくださる約束だったが、折悪く宗教局長、急用のため王先生一人でホテルに來られた。

王先生はまず、昨秋の天皇陛下ご訪中の際案内役をつとめられたこと、両陛下は中国人民が

ら熱烈歓迎を受けられ、両陛下また中国人民にたいへん好ましい印象を与えてくださったこと、パーティもこのホテルで大盛況だったことなどを語り、初対面の私たちのためになごやかな雰囲気づくりをしてくださった。さすがはと感心した次第。こんなわけではじめから打ち解けた話し合いとなった。

王先生は、道義の頹廢と人口政策によりどの家庭も一人っ児のため、過保護に陥り、子供のわがままが目には余るようになったと、嘆いていた。私は「そうだろうなあ」と思った。

十三年前、天童寺を参拝したとき、飛行機や火車（汽車）の乗務員は女性で（これは今も同じことだが）、彼女らは化粧もせず質素な衣服をまとい、実に清楚な感じで物腰やわらかく親切で、かつての大和撫子を想わせるものだった。男子青年もまたりっぱで、「あなた方は随分不由な生活しておられるようですが、不平や不

満はありませんか」と訊ねると、彼らは、「みんなが仕合わせになるまでは頑張ります」と昂然と胸を張っていた。当時はこの意気込みが国中に漲っていた。

またホテルでは、「中国には泥棒がいまさら」といつて鍵も渡さなかったし、事実盗人はいなかった。さらに、不要品を捨て置くと、「不要品」と明記してない限り、次の宿泊地まで届けられるといったふうだった。それから、子供たちに物をやろうとすると昔の子供たちと違って決して受取ろうとしなかった。

「実にりっぱだがいつまで続くのだろう」私は不安を感じたものだった。というのは、戦時中、軍人勅諭といえは軍人の生命にも等しいものだったが、敗戦の翌朝、私は便所の中で、尻拭き紙にちぎられている軍人勅諭集の残骸を見たのである。これと同じでイギオロギーのタガがゆるんだら、自由化が進んだら、この心の支

えは音を立てて崩れ去ってしまうのではなからうかと。それがいま現実の姿となってあらわれているのではないか。

十三年前はまだ子供が多かった。私たちの周囲に集まって来て一緒に撮った写真も何枚かある。しかし今回はそうした子供に会うことは絶えてなかった。子供といえば親を従えた小皇帝としての姿だけだった。日本以上に過保護のようを感じられた。十三億の小皇帝が十三億の大皇帝に成長したとき、中国はいったいどんな姿に変貌するのだろうか。

交通事情も悩みのタネの一つ。バイクは規制されているためごく少ないが、自転車はすごい数である。ラッシュ時はまるで洪水のようである。経済が成長してこの自転車からクルマに代わる時が来たらどうなるのだろうか。人口が多いだけによほど大きなスケールのもとに施策を講じなくてはパンクしてしまうであろう。

王先生は日本の成長ぶりに感銘し、息子を日本に留学させているほどの親日家で、お世辞ではあろうが、「日本に学ばなくては」といわれるのであった。

理事長は、「上海は総合的にみて中国最大の都市である。その上海の指導的地位におられる先生なのだから、グローバルな見地に立ってまず人材養成に心がけ、貴重な意見を糾合し、総合的な施策を講ずることに努力していただきたい。なるほど日本は短期間に成長を遂げたかも知れないが、真に総合的な施策を講じなかったため、経済は発展したが、反面人心の荒廃を招いてしまった。この轍は絶対に踏まないようにしてほしい」

と、おいしい紹興酒の酔いの勢いもあつての大熱弁をふるった。王先生もはじめは理事長の大熱弁にびっくりした様子だったが、理事長の熱意のほどを素直に受けとめてくれ、自宅に帰

られたあとも、李さんを通して電話で礼を述べ
ておられた。

こうして中国第一日の日程は無事終了した。

寧波・天童寺 六月十六日

早朝ホテルで食事をとり、空港に向かう。六
時少し前に着いたが、入口の扉は締っており、
大きな荷物を持った大勢の搭乗客が広場に蝟集
し坐り込んでいる。その光景は五十年前とあま
り変らない。いや、それ以前のパール・バック
の『大地』に描かれてあるあの光景である。

「払下げ」とか「買上げ」などという言葉が
いまなお官庁の予算書に無神経にも平然と使わ
れている日本は近代国家らしからぬ官尊民卑の
国だが、この国はそれどころの話ではない。サ
ービス精神など片鱗もうかがえない。まさに終
戦直後のあの国鉄といったところか。

六時開扉と同時に群衆は、まさに非難民でも

あるかのようにわれさきにと建物の中に吸い込
まれてゆく。

上海と寧波、地図で見れば指呼の間だが、さ
すがは大陸、飛行機で四十分を要する距離であ
り、乗客もほぼ満席だった。

寧波はもと慶元府とも呼ばれ、市内を甬江が
流れているところから甬の地名もある。道元禪
師がここから上陸されたことはご存知のとおり
で、上陸地点も残っている。

寧波は昔より漁業、海運、農水産物の拠点で
栄えたところだが、潮の干満の差が激しいので、
上海にその繁栄が奪われたという。ここから天
童寺まではクルマで約五十分、東へ三四キロの
地点に在る。

今から十三年前の昭和五十五年一月三日、香
港総持寺会の理事長林一生活氏ほか五名が天童寺
を参拝した。そして住持広修法師に面接はした
ものの、その頃の住職はまだ宗教事務所職員のも

指示通りに動くロボットの存在でしかなかった。

そこで林氏らは浙江省人民政府（省都は杭州）

の宗教事務所長楊子林氏及び旅遊局長劉才傑氏に会い、同じ中国人として忌憚のない意志交換をおこなった。その結果、「天童寺は中日両國曹洞宗の祖廟」であるにより、「今後、両国仏教界の友好往来を盛んにし、さらに一層友誼を深めよう」と相互の要望を確認し会い、「総持寺参拝団をぜひお招きし、全行程責任をもって案内したい。ただ三月に入ると日程が詰まっているので、なんとか二月下旬に来訪してほしい」と要請を受けた。

端的に言えば、一四人組を追放して、宗教に對する寛大な施策を打出したものの、人民がそう簡単には信用してくれない。そこで日本から大勢の参拝団がやって来て、敬虔な態度でお寺詣りしてくれば人民も早く納得するであろうし、それはまた外貨獲得にもつらなり、一石二

鳥の成果を挙げることができるというのである。

林一生涯からその旨電話で報告を受けた私は、とにかく来日して乙川禅師に直接報告しなさいと返答した。それにより一月十五日来日した林氏は乙川禅師を拜問、詳細を報告した。そこで乙川禅師は一月二十一日、松浦監院一行を特使として派遣することになり、私が一切をとりしきるようになった。

まだ寒い季節でもあり、また出発まで間もないことなので、私は寒さに強く、そしてパスポートを持っているだろうと思われる人々に次々に電話して二十五名を確保したが、うち一名はカゼのため出発間ぎわに取止めとなった。

かつてマスコミが「中国は竹のカーテンを張りめぐらしている」といったが、その頃でも中国の事情はなかなかうかがい知れなかった。何か参考になるものはないかと探したが、ようや

く次のことぐらいいしかわからなかった。

中国仏教は日中戦争、内戦、革命政権の誕生、文化大革命紅衛兵騒動で、唐の武宗の会昌大破仏を凌ぐ損害を受け、六十万の僧侶（男僧五十万人、尼僧十万人）は一九六〇年に十萬を割り、いまやその十分の一すらおぼつかない状況である。人民政府は、外国人や華僑接待のためと文化財保存と憲法上信教の自由の象徴的存在という三目的のため、由緒ある寺院を若干残すのみで、僧侶は何等の発言力も与えられていない。

いや、はや、たいへんな状態なんだなあ、という不安と、体制の違う国にはいる緊張の交錯した気持で天童寺に拝登してまずおどろいたのはその宏壮な堂塔伽藍であった。ところがそれ以上に驚いたのは紅衛兵の徹底したその破壊ぶりだった。北京政府は莫大な予算（七十五萬元、実質十億円）を投じて修復に当たっているが、それでもまだ進捗率四七％に過ぎないという。

巨大な仏像はみな塑像で、まだ充分乾き切っておらず、ところどころに干割れがあったが、私ども参拝のため、わざわざ足場を取り払ってくれている。

大雄宝殿（仏殿）の三世仏は、中央が釈迦牟尼仏（脇士は迦葉・阿難）、その右が薬師如来、左が阿弥陀如来で同型同寸（総丈一〇メートル）、法界定印を結んでいる。薬師・阿弥陀が法界定印とは？と思つて訊ねてみたが、前の通り造つたので間違いないとの返事だった。

ここでも、如法衣に身をかためて感激の拝登諷経をおこない、翌朝は四時から五時までの朝課に参列した。緋の袈裟をかけた広修住持を導師とした十数名の僧侶により『般若心経』『楞嚴呪』『讚仏偈』が読誦され、ついで私ども参拝団のための祈禱会が設けられた。

この時の参拝でいま一つ忘れられないのは、私たちを迎えてくれる実に心のこもった氣くば



りである。どうしても天童寺に泊ってほしいと、前もって連絡あったのも道理で、私たちのためにまず新しい寝具を整えてくれていた。真新しい木のベッドと毛布、ふとんを揃えてくれた。間に合わなかったのであらう、ふとんは綿の上下に布地を置いただけのものだった。東司（便所）もようやく出来上ったばかりのところだった。

底冷えのする寒い夜だった。ベッドの下に便器が置いてある。朝排尿した容器を持ってドアを開けたら待機していた一人の青年がサツと便器を受取ってくれた。これにはおどろいた。彼らは室外に不寝番をしてくれたのであった。

たくさんのポットと新しいタオルが準備され、なにもかも新調して、出来得る限りの準備をして迎えてくれたのであった。

日中友好関係修復以来、いや戦後以来、天童寺に拝宿できたのは私どもをもって嚆矢とする

であろうことを思うとき、その感激はひとしおであった。

無事下見を済ませた私は早速総持寺参拝団の編成に着手した。そして一八〇名の参拝団を編成し、五月二十八日、成田と大阪の二つの空港を離陸した一行は、夜、香港エクセルシオール・ホテルで合流して結団式を挙げ、翌二十九日、本隊は啓徳空港発チャーター機で杭州に飛び、大阪班のうち三十名は広州に向かい、広州から定期便で杭州に飛び、ここで本隊と合流、西冷賓館の大ホールで浙江省人民政府主催の歓迎会に臨んだ。

浙江省副省长陳作霖氏が省政府を代表して歓迎の辞を述べ、乙川禪師が謝辞を述べ、記念品を交換して、実になごやかなふんいきのもと、歓談の宴がもたれた。

翌日は杭州観光、そして三十日寧波に向かつて出発。翌六月一日、乙川禪師は省政府さしま

わしのクルマで天王殿前に到着。住持広修法師ははじめ一山の清衆は昔、皇帝を迎える際の古式による堵列をもって迎えられた。禪師は天王殿で五盃三拜ののち接賓に入り、型のごとく挨拶と記念品交換をおこなった。乙川禪師は猷香料のほか二十三人分の法衣と曲录、その他の仏具を寄贈してたいへんよろこばれた。

これで私は半年近く背負っていた重い荷物をおろした気持になり、ホツとしたものだった。

クルマの中で往時を回想していると、やかてなだらかな山道にかかり、峠の五仏鎮鱗塔が見えて来た。昔、ウワバミに毒饅頭を食わせて退治したという。そのため、いまもこの塔のあたりには饅頭の形をした石が散在し、割ると真ん中が餡そっくり黒くなっている。ここを過ぎると下り坂で、右によく整備された人造湖を眺めながら進むといよいよ天童寺第一の山門が見え

てくる。もうこのあたりにくると、大勢の参拝客の姿が見えてくる。第一山門をくぐると両側は松並木、第二山門をくぐって第三門を通ると、右手は石積みみの古堀、小さな池。その目の前にパツと展開するのが萬工池。昔、土砂崩れで池が埋まった時、一人人の人工で復旧したのでこの名があるという。この池の対岸に「東南仏国」と書かれた牆壁があり、その向うが天王殿。みな懐しい風景である。

クルマから降りると大勢の参拝客の視線を浴びた。中国僧とは違う僧形が珍らしいのである。こういう場合、韓国などでは必ず合掌する人がいるのだが、今日のこの国にはまだ帰依僧の信仰は芽生えていないようだ。それは無理からぬことで、ついこの間、僧侶は三角帽をかぶせられて街中を引きまわされたのだから。しかし、前回来た時は観光だけの群衆だったが、今回ののは明らかに参拝客である。香花灯燭が供え

られ、敬虔に合掌する姿が多い。熱心に祈りを捧げている人の姿も少くない。

徳雲副監院が出迎え、接賓（応接室）に案内してくれた。まだ三十歳台か。それもそうだと思う。中間層が欠落しているのだから。

早速訪問の趣意を伝えると、実は住持の明暘法師は私どもの訪問を心待ちしていたのだが、急の用向きで上海に出かけたとのこと。電話で連絡しましょうということで、早速電話をしてくれた。その結果、私たちの旅行日程に合わせて二十日北京の広濟寺で会いましょうということになった。一時は上海に逆戻りしなくちゃならんかと気をもんだあとだけにホッとした気分になった。李さんは王生洪先生にも電話して、側面からの協力を依頼してくれた。

天童寺拝登の第一の要件はケリがついたので、次は身も心も威儀をととのえて仏殿にのぼり、声高らかに『般若心経』を誦した。壇上の三

世仏は金色燦然としてにこやかにほえんでおられた。

拝登諷経を終えて、仏殿前の回廊に出ると、そこでひよっこり前住持の広修法師に出会った。広修法師は眼をわずらい、ほとんど視力が失われているとか、道理ではじめは無表情だったが、私と話かけると当時のことを思い出してくれ、「よく来てくれた！」と、堅く手をにぎってくれた。

改良服に衣替えして諸堂を拝観し、天王殿の前で徳雲副監院と記念撮影してお別れし、天童寺をあとにして寧波の宿舎に戻った。

杭州 六月十七日

今日は列車の旅。日本の汽車は中国では自動車のこと、汽車は「火車」という。駅は「火車站」。中国は土地が広大なので、土地に「糸目は付けず」、駅は実に宏大なもので、その威容に

圧倒される。

列車は新幹線と同じく広軌だが、プラットフォームが低いだけに大きく高く見える。

列車は硬座車と軟座車、そして軟臥車にわかれている。私どものは軟臥車だった。旅行案内によると、「軟臥車は、日本の一等寝台にあたるもので、場合によっては飛行機より高い乗物だ云々」とある。これは素晴らしい旅ができると思うを躍らせていざ乗車してみると、聞くと見るとの大違いで、旅行案内記の軟臥車は主要路線のものらしく、ローカル線の鈍行の軟臥車はなんのことはない、三段式寝台車の中段の寝台を垂らして背凭れにし、上段に荷物、下段に三人づつ向かい合って坐るだけのもので、窓際に細長い折りたたみ式のテーブルがあるだけ。お茶の好きな中国人は蓋付きのコップと茶の葉を携行している。お湯はポットで提供してくれるので各自コップに湯を注ぎ、茶の葉が開いて下に沈



む頃合いを見はからつて飲み、また蓋をしてのどが乾いたらまた飲むといった具合である。

気温は三十五度、梅雨季なので実にむし暑い。しかし窓はあけられない。なぜなら列車のトイレは水洗式ではなく、また貯溜式でもなく、全くの垂れ流しである。窓をあけようものならすごい臭気の来襲を受けるといふ。それにしても暑い。窓の上に扇風機があるが、スイッチを入れてもビクともしない。たまりかねて李さんが乗務員室に連絡した。中年婦人の乗務員がやって来た。まことに態度が大きい。

中国には「怕太太」といふ言葉があるという。「怕」は恐ろしい、「太太」は夫人のことなので日本式に言えば恐妻というところ。こんな笑話がある。ある処で男だけの会合があった。中の一人が「怕太太の者はこちらに集まってください」と言った。するとただ一人を残してみんながその指示に従った。残った一人に向つて、

「君は怕太太でないのか」といふと、「いや、怕太太です」ではどうしてこつちに集まらないのか?」「その、実は今日出がけに、人の誘いのつてはいけない、と言われたばかりなものですから……」といふことで、一番の怕太太だったといふのである。

両腕をうしろにして尻のあたりで組んでいるこの中年女性の乗務員を見ると、まさに男を威圧するかのよ様な態度で、何等手をほどこそうともせず、「辛辛苦了」といつて出て行つた。「辛辛苦了」これは「ご苦労さま」といふ意味だが、私は「なるほど、これが『新クーラー』か。没法子」と観念した。

寧波——杭州、わずか一八〇キロ区間を四時半かけて走るのだから時速は四〇キロ。九時の出発当時はまだよかつたが、日が高くなるにつれ、むし暑くなってくる。アンダー・シャツ一枚でも汗びっしょり。

私は阿鼻（無間）地獄の火の車に乗せられて
いるのではないかという気にさえさせられた。

「極楽の迎えは見えずして、本意無く（意に
添わないこと）火の車を此れに寄す」（『今昔物
語』）

阿鼻地獄の鉄車、火の車は生前悪事を犯した
者に乗せて無間地獄に運ぶ。その距離二万五千
由旬、地獄の悲鳴を耳にし、悶絶する……。そ
の距離二万五千由旬というが、実はホテルを出
て二万秒、そろそろ到着だと思っていると、
着いたところは地獄ではなかった。

昔から「上有天堂、下有蘇杭」（天に極楽、地
に蘇州杭州）といわれるように、蘇州・杭州は、
景色よし、酒よし、お茶よし、美人多し、とき
れている。蘇州は戦時中の流行歌の影響もあつ
てか日本人には特に懐しい土地柄ではあるが、
杭州の風景はそれに数段優るものである。

まず宿舎の香格里拉飯店にはいった。香格里拉と

はシャングリラと読み、私どもバンコクでもよ
く利用する、中国人経営の有名ホテルであるが、
ここで一悶着が起きた。

理事長は私の老体を案じ、万事に亘って細か
な心遣いをし、特にホテルには気を配ってくだ
さっている。ところが中国の旅行社がピンはね
しているのであろう、支払った金額相応のホテ
ルを提供してくれない。現に寧波のホテルは三
ツ星（五ツ星が最高ランク）だったし、朝食も
いたってお粗末なものだった。ここシャングリ
ラは前述のとおり名の通ったホテルではあるが、
キーを渡されたところで理事長が、「湖の見える
ところだろうか？」と訊ねると、「いいえ、山際
です」という。せっかく杭州までやって来て、
湖の見えない部屋とは何事だとはかり、理事長
は旅行社とホテルの係員を相手にその不当をた
だし、支払った金額だけの待遇をしろ、と迫つ
た。係員、しぶしぶ返事して、次に出して来た

キイをみると、三人の部屋、階も違えば遠く離れたものだった。あきらかに意地悪をしている。さて、私の部屋は湖の見えるところではあつたが、理事長の部屋は小さな上窓一つだけの薄暗い部屋だった。そこで又タロビーでかけ合うことになつた。事態を重くみた支配人が出て来て平身低頭して部屋を変えてくれた。なんのことはない、私の部屋の両隣りがちやんと空いていたのである。

ホテル関係者は、白人に対しては卑屈なほどの応待ぶりだ。これは白人は気に喰わないことがある。ところが東洋人に対しては、「われは中華の民なり」という自尊心があり、相手はまた文句をいわない。とくに日本人に対しては、成り上り者といった侮蔑と妬みの入りまじつた感情をもつてはじめから好意的ではない。だからここで三度部屋を取り替えさせたことは実に小氣

味よいことであつた。

道元禪師も入宋直後のころ、外国人僧なるをもつて末席に遇された。これは法臘ほうろう（出家の年齢）によるべきだと寺当局に抗議したが受け入れられなかつたので時の皇帝に上表してその意を達した故事もあり、やはり言うべきことはきちんと言ふべきである。

杭州を訪れた最大の目的は如浄禪師のお墓詣りである。如浄禪師のお墓は、西湖の名所三潭印月の西の方にある、静寂そのものの名刹であり、誰もが簡単に如浄禪師のお墓詣りできるのかと思つたら、さにあらず、寺当局に申し出て許可を得なくてはならぬという。旅行社の係員が交渉に向いたが、なかなか戻つて来ない。そのうち晩課ばんか（禪院における三時諷經ふうぎやうの一つ）の殿鐘が鳴り出したので仏殿の前の石段のところにいると、次々と仏殿にのぼってくる僧侶、歩きながら法衣をまとい、袈裟もつけず、キョ



ロキヨロあたりを見ながらの読経、まさに「春の田の蛙の、昼夜になくがごとく」の感あり、威儀即仏法いぎそふつぽう、作法是宗旨さぼうこれしゆしなどどこにも感じられない。指導層もないのだから無理からぬことかも知れぬがこれでは中国仏教どこへゆくのであらう。奮起一番を望んで止まない。

係員の戻るのがあまりにも遅いので、これは献香料をさきに出すべきではなかったかと、話しているところに知客和尚がやつと来たので、献香料を差上げると実にスムーズに事が運び、墓前に読経をさせていたがいた。

知客和尚は、如浄禅師は道元禅師の師匠様たということをさかんに強調される。同じ中国人として当然のことではあるが、私どもからすれば道元禅師が傑出した方であればこそ如浄禅師も高く仰がれるのである。

人間成功すれば、本人のみならず親や先生の名が世に出る。悪事をはたらけば、善人である

親までが世の非難を受ける。同じように私どもがひたすらに仏祖の道を行ずれば、諸仏の行持が世にあらわれ、怠ければ諸仏の大道がすたれる。瑩山禅師の『伝光録』に、

ただ諸人の精進と不精進とに依って、諸仏頭出頭ぶつゆつづぼつ没せるのみなり、今日も頻りに弁道し、子細に通徹せば、釈尊直に出世なり。ただ汝等自己不明に依て、釈尊昔日入滅す。汝等己に仏子たり、何ぞ仏を殺すべけんや、故に急に弁道して、速かに慈父と相見すべし。

私どもの精進と不精進によって仏があらわれたり、隠れたりするのであるから、明日といわず、今日只今精進弁道すれば釈尊は直に出現される。私どもが真実に自己を明らかに悟り得ざるがために釈尊が雲にお隠れになったとすれば、私どもが釈尊を殺したことになる。だから速かに弁道して慈父たる釈尊に相まみえなくてはな

らぬ——とある。

如浄禪師の墓前において、道元禪師の偉大さ
を思い、瑩山禪師のみ教えをかみしめたのであ
った。

杭州—北京—西安 六月十七日

今日は空の旅。

杭州一〇時五五分発 北京一二時四〇分着

北京一四時 五分発 西安一五時五五分着

これが搭乗予定なのだが、はじめから一沫の
不安があった。というのは昨日午后、明朝の飛
行機は飛ばないらしいという情報が流れた。搭
乗券を売り出しておいてから妙なことをいうも
のだ、と思ったが、ここは中国、日本の物差し
では測り知れない。ことによると飛行機にエン
ジン・トラブルでもあって、欠航せざるを得な
い状況にあるのではなからうかと、不安だった
が、朝、空港へ電話で連絡をとると予定どおり

飛びますという。

空港に着いてみると、どうも様子が変だ。搭
乗手続きがいつまでもはじまらない。二十分、
三十分と時は遠慮なく過ぎ去ってゆく。「四十分
遅れると乗り継ぎは出来なくなる」と、李さん
は時計を見ながら気をもんでいる。その四十分
もとつくに過ぎて、ようやく搭乗はしたものの、
飛行は遅れに遅れて十二時を過ぎてようやく離
陸した。

旧ソ連製の飛行機で、よくもこんな飛行機を
飛ばしているものだとあきれくらいの代物で、
座席の背凭れはリクライニング出来ないものが
あるかと思えば、一度たおすと戻らないものも
あり、よく乗客から苦情が出ないものと感心な
らぬ寒心させられる。

ロシア女性のスチュアデスが乗務していたが、
彼女、サッカーの選手でもあったのか、床の
上に落ちた物をまことに巧みに足で操作する。

とくにロング・シュートはお手のもの、いや、お足のもので、こういう女性と結婚する旦那は脛に生キズが絶えないだろうと案じられ、中国女性よりも怕パだという感じを受けた。

皮肉なことに搭乗機が北京空港に着陸したのは十四時五分だった。全く同時刻に乗継ぎ予定の西安行きが離陸した。

「さすが長安の都、簡単に行けないなア」と嘆息した。

北京空港のロビーに降り立つと、旅行社北京支社の係員がのっそり姿をあらわした。一見して「この男、旅行者者としてつとまるのだろうか」と不安になった。暗くて陰気でのろのろして声は低く何をしゃべってるかわからない。あとでわかったことだが、西安から北京に戻った時、彼の暗い表情と動作に不審を感じた李さんが訊ねたところ、彼がもつとも頼りにしていた叔父が急逝したので、彼は悲観のあまり何度も

自殺しようとしたのだが死に切れなかった、とのことだった。そんな状態の時だったので、とんだ手ぬかりがあつて、彼は十六時発西安行きの飛行機の運行状況を確認せずに私たちの搭乗手続きを済ませて帰ってしまった。

搭乗待合室にはいつてみると、十六時発の西安行きは「欠航」とあり、赤ランプが点滅している。椅子は満席で、床に腰をおろしたり寝ころんだりしている人でいっぱい。

「これから五時間、どう過ごそうか。体もつだろうか」だんだん不安になってくる。理事長は、「ご老師、ご無理なら西安行きはやめましょうか」とおっしゃる。「いや、とにかく頑張ってみます」と強がりと言ったものの、全く自信はなかった。

こんな状況の中で張さんの大活躍がはじまったのである。張さんにとっては、昨日と今日は大厄日だった。昨日は理事長から旅行社の非を

手きびしく指弾され、今日は朝からトラブル続き。旅行社の職員として、また中国人民として、顧客である海外旅行者に対してどんなにか肩身の狭い思いをしたことであろう。彼女は会社の社長に直々電話して、「こんなように面子丸潰れでは即刻やめさせてもらうしかない」と声涙こもこも訴えた。社長もこれには驚いたに違いないが、そこは社長の貫祿で、張さんは慰留され、はげまされ、心機一転した。というのが李さんの報告。張さんについては北京支社に電話して、旅行社とコネのあるレストランに私たちの夕食を準備して待機するよう連絡をとり、私たちを空港外に連れ出してくれた。おかげで立ちん坊の重労働から解放されることになり、ホッと精気を取り戻した次第。

二十時、ようやく西安行きの飛行機に乗ることができた。これも飛行機のやりくりがつかなくなったからしく、急きよ国際線の飛行機が代替さ

れ、バスは遠く国際線のボーデング・ブリッジまで十分近くも空港内を突っ走った。今日一日の罪滅ぼしか、いい飛行機といいサービスが提供されて西安入りが実現した。

ホテルに着いたのは〇時を過ぎた頃だった。想えば長い旅だった。杭州のホテルを出て八時間着く予定のものが実にその倍近くの時間を要したのであり、心理的時間の長さは計り知れない。さすがは大陸だなアという思いを深くした。

西安 六月十九日

西安は古都長安。洛陽と並んで中国史上もつとも著名な旧都で、漢代から唐代にかけてもつとも繁栄した、シルクロードの関門でもあり、遣唐使が儒学や音楽など多方面の学問を身につけたところとして有名である。

上海の時もそうだったが、ここ西安でも李さ

んの友人が私たちをあたたかく迎えてくれた。ことに西安では、乗り心地のよいクルマを提供してくれ、そしてプロのカメラマンが同行してくれた。

予定通りならば昨日の夕方には西安に到着するはずだったので、「餃子館」を予約して副市長以下、大勢の友を招き待機しておってくれたのだという。それが想像外の延着だったので、準備した餃子も食べきれず、残りは各自が折詰にして持ち帰ったという。だから今夜はぜひその「餃子館」へというわけで案内されたが、おどろいたことに餃子の種類が百八種といい、それぞれ味も形も違うのであった。二十種類はぜひ食べて欲しいということだったが、精々十二、三しか食べられなかった。

西安は麦の主産地なので、餃子も小麦文化が生み出したもの一つで、フランスのパンに匹敵するものではなからうか。

これは夜のことをさきに書いてしまったが、ホテルで李さんの友人と初相見、そしてまず最初に案内されたのは華清宮だった。ここは周代からといわれるから凡そ三千年の歴史を持った温泉地で、華清宮と同名の池華清池がある。ここを最も有名ならしめたのは唐代の玄宗皇帝と楊貴妃の愛の物語であろう。楊貴妃は実は玄宗皇帝の実子である寿王の妻だった。それを玄宗が息子から取りあげ、親子ほどの年の離れた楊貴妃との愛に溺れ、政治をかえりみなくなったため、安祿山の乱を招いた。長安から蜀へ逃げていく途中楊貴妃は殺され、玄宗は悲しみのうちに蜀に落ちのびる。やがて政権が安定した後、長安にもどった玄宗は楊貴妃のことが忘れられず悶々の日を送り、その魂を探し求める。これを謡いあげたのが、かの有名な白居易(白樂天)の「長恨歌」である。この「長恨歌」の最後の方に、

天に在りては、願くは比翼ひよくの鳥とりと作り

地に在りては、願くは連理れんりの枝えだと為ならん

という名句がある。

天上においては、翼を連ね常に一体となつて飛ぶ比翼の鳥、地上においては、枝と枝とが一つに結び合う連理の木となり、いつまでも一緒にいたいものである、という意味で、これを中
学時代、漢文で聞いたとき、比翼の鳥も連理の枝も、ともに想像上の鳥であり植物であろうと思つていた。ところが五十年前軍隊で南京におつた時、連理の木が実在の植物であることを知つた。二本の幹から出た枝が一つにとけ合つている木を現にこの眼で見たときの驚きは大きかつた。そして、連理の枝が実在のものであるなら、比翼の鳥も実在したのではなからうかと思ふようになった。ちょうどその頃、アメリカのP38と称する双胴の戦闘機が時折南京の上空にあらわれ、機銃掃射をした。それを見た私は、



「あッ、比翼の鳥！」と思ったものだった。

華清宮で玄宗と楊貴妃のロマンを思い、この話をする、李さんのいわく、

「P 38の設計者は中国人なんです。そして比翼の鳥にヒントを得て生まれたのがあの飛行機なんです。それは設計者自ら著作で述べております」と。

これを聞いて私は半世紀にわたる疑問が解けた思いで、西安にまでやってきたご利益にしみじみ感じ入った。

ここ華清宮はまた、現代中国の政治舞台を大きく変えた一ページを飾っている。今から五十六年前、蔣介石はここで張学良に幽閉され、第二次「国共合作」に調印し、中国の歴史を大きく転換することになったのである。折も折、この華清宮で往事を偲んでいる時、日本の国会解散の報が李さんによってもたらされた。日本の政治舞台も大きく変るのであらうと痛感する。



西安といえ最近脚光を浴びてゐるものが秦の

始皇帝の兵馬俑である。今から十九年前偶然発見され、二年後にさらに二つの俑坑が発見され、約八千体の陶俑陶馬と一万件の武器が出土してゐるといふ。これらは戦いに臨む実戦軍陣の姿で、整然とした隊列は始皇帝陵を守るための近衛軍団の縮図ともいふべく、まことに素晴らしいものである。いまは、巨大なドームで覆われ、発掘されたまま展示されている。陶俑陶馬は東を向いており、これは秦国に征服された六国からの反撃を防備しながら監視する意を表しているのだといふ、二千百年前の秦軍の雄姿が生きて生きと私たちの眼前に再現されている。

秦始皇帝は現在では墳丘が残るだけだが、かつてはこの兵馬俑坑を含む、周囲六キロにも及ぶ広大なもので、地中には壮大な宮殿が造られていたといふ。現在でも発掘作業が続いており、やがてはいつの日にかその全貌が明らかになる

のであろう。

長安というところ、私ども仏教徒はまず玄奘三蔵を思い出す。玄奘三蔵の生誕の年にはいろいろ異説があるが、現地刊行の『長安懷古』によつて西歴六〇〇年説によることにする。

玄奘三蔵法師は十三歳で出家、二十二歳で得度し、その後兄に伴われて長安に来て、仏教經典を学ぶうちに仏教哲理にいろいろ疑問を感じ、その疑問の解決とさらに一層仏教を深く究めるため、国法を犯して長安を離れ、シルクロードを通つてインドに向かうのであつた。

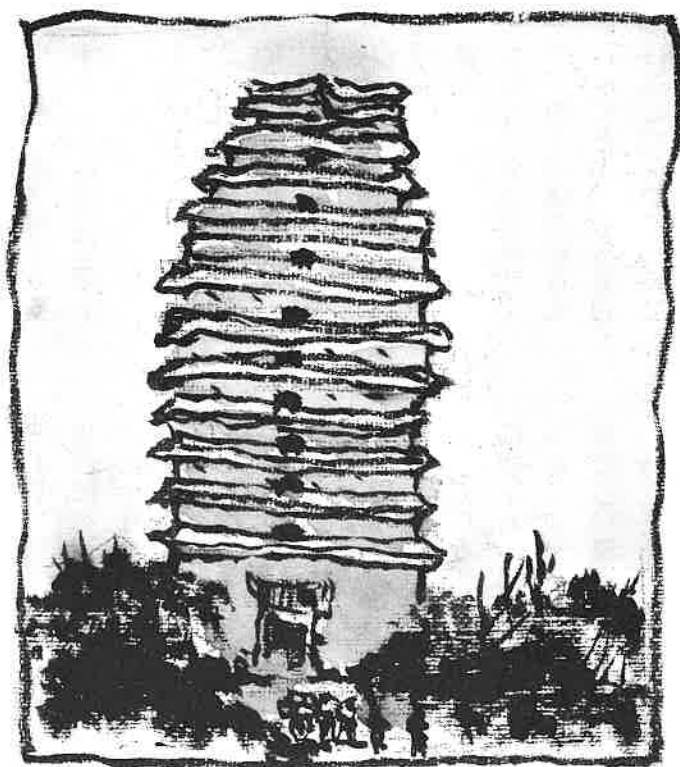
シルクロードといへばいかにもロマンチックで優美なイメージが湧くが、玄奘三蔵より二三十年も前にこの道を辿つた法顯ほつげんの『法顯伝』によると、「砂漠には悪鬼、熱風あり」「遇えば忽ち皆死して全き者無し」「空に一飛鳥なく、地に一走獸なし」「人骨、獸骨の類をもつて行路の標識となすのみ」といつた文字があるとおり、実

にけわしい危険な道で、インドに向かった坊さんのうち、無事中国に帰還できたのは一割にも満たなかったといわれる。それほど危険な道であり、シルクロードを旅することは国法で禁じられていた。

今や国内では学ぶべきものがなくなつた玄奘は、本場のインドに出向き、お釈迦様の足跡を辿り、真実の仏法を求めなくてはと意を決し、幾度も出国を上奏請願したが、その都度却下された。そこで玄奘は二十八歳の時、国禁を犯して出国し、一年がかりでインドに到着し、インド各地に仏跡をたずね、仏教を学び、四十歳の時帰国の途についた。インドにあること実に十二年。帰国は四年がかりで、四十四歳の正月七日、長安の都に帰り着いたのである。密出国者であつた十七年前の玄奘はここで凱旋將軍のよくな大歓迎を受けた。時の皇帝、唐の太宗は玄奘の帰朝を心から歓迎し、はじめ玉華寺を与え

て翻訳に従事せしめた。五年後、高宗が太宗に代つて皇位につくや、皇太子時代、母の慈恩を追慕して建てた大慈恩寺に、玄奘三蔵のために訳経院を造つた。ここで玄奘三蔵は十一年の間に七十五部千三百十五巻の梵語經典を漢訳したのであるが、玄奘三蔵はこの寺の境内に塔を建てて仏像と經典を保存したいということを高宗に願ひ出た。高宗は玄奘三蔵の願ひを聞き入れ、玄奘三蔵の建議によつてインドの仏塔ストウパを真似て、五層の塔を建てた。これは西暦六五二年、玄奘三蔵五十三歳の時だつた。これが有名な大雁塔がんたである。大雁塔は則天武后の長安年間（七〇一〜七〇四）に大改造がおこなわれ十層となつた。しかしその後の戦乱などで七層から上が崩壊し、現在は七層で、高さが六四メートルといわれ、今日西安のシンボルの存在となつてゐる。

玄奘ほど有名ではないが、義浄（六三五〜七



一三) もまたインドを旅した高僧であるが、義浄は薦福寺を経典翻訳の道場として西暦七〇六年から二十二年間、五十六部の経典を漢訳した。小雁塔はその頃経典翻訳の道場として造られた塔であり、もとは十五層だったが明代の大地震の際、上二層が崩壊し、現在は十三層、四三メートルの高さである。大雁塔が直線の男性的なのに対して、小雁塔は曲線的、女性的で、ともに西安を代表する塔である。

西安の二日間は、李さんの好意と、李さんの友人の心あたたまる奉仕によって、ほんとうに楽しく有意義なものだった。

北京 六月二十日

来る時とは全く違って、北京に戻る今日は予定通りスムーズに事が運び、いや、スムーズに運び過ぎて気が抜けたのか、李さんの友人から贈られた掛軸三幅をホテルに忘れてしまったり

して、アツという間に北京に着いてしまった。ホテルに着いて早速広済寺に電話すると天童寺住持明暘法師が待つておられるというので、早速出かける。

広済寺は北京でもっとも古い名刹の一つである。十三世紀の金朝末期に、この地に西劉村寺が建てられた。明代の成化年間(一四五六―八七)に再建され、その後弘慈広済寺に改められた。これも紅衛兵に破壊されたが、その後の大修復で荘厳さを取り戻した。

広済寺は現在の中国仏教協会本部になっており、明暘法師はこの寺を兼務、中国仏教協会の副会長をつとめておられる。午後からまた会議があるというので昼休みに参上したが、明暘法師は快く丈室に私どもを迎えてくださった。

理事長が、横浜善光寺留学僧育英会の名誉顧問ご就任をお願いし、役員名簿をお見せすると、両大本山貫首禪師、山田天台座主、中村元先生

等のお名前をごらんになり、「みな知ってる方々！」と、顔を綻ばせて快諾、日本にも何度か来られているので四方山の話に時の経つのも忘れて話込み、記念撮影ののち、堅く握手をかまし、再会を約してお別れした。

天童寺で不在と聞いたときは一時、ダメかなくと思つたが、電話連絡の結果、「北京で会いましょう」ということになり、それがいま実現したのだからそのよろこびはまたひとしおで、ホツとした途端に空腹を覚えた。それもそのはず、早朝ホテルで粥食を食べただけだった。

天安門広場に近いレストランで昼食を済ませ、李さんの知人の勧めにより雍和宮を訪れることになった。

李さんの知人の女性の電話による指示に従つてタクシーを走らせて雍和宮の前に着いた。すると待機していてくれた彼女が飛んで来て私どもを門内に案内してくれた。よほど熱心な信者

なのであろう、どこもフリーパスで方丈に案内してくれた。

ここ雍和宮は黄帽派チベット仏教寺院で、かつて清朝雍正帝の宮殿をチベット寺院にしたものである。現在のチベット仏教徒（ラマ教）はチベット族と蒙古族がほとんどだという。

筒袖の和服といった感じの栗茶色のころもに黄色の帯をした、いかにも如才のない好々爺があらわれた。「你好！」といつて名刺を出してくれた。住持の加木揚・吐布丹法師である。そこへ精悍な蒙古の騎馬武者を想わせるような同じ服装の若い僧侶がはいつて来た。名刺の肩書には「管家」とある。監院か副住職のことであろう。親子だとも聞いた。

理事長が、「こちらで修学しておられる嘉木揚凱朝さんが、日本に留学を希望しております……」と話し出すと、「それは聞いてません。本人から一言の連絡もありません」と、お二人と

もやや不機嫌な表情。

「実はまだきまったことでもないのです」と前置きして詳しく事情と経過を説明し、「いまおうかがいしたのはその事とは関係なく、お詣りさせていただきたく参上したのです」と述べると、ようやく納得して歓談してくれた。

歓談終わって副住職の馬志徳法師が諸堂を案内してくれた。

宮殿内にはチベット仏教の代表的な仏像、仏画が数多く展示されていた。一番北側の万福閣には地上―八メートルの一木造りの弥勒像が立っている。一木造りとしては世界最大のものといい、ギネス・ブックにも載っているとのこと、そのことが大きなプレートに標示してある。

ご承知のとおりチベット仏教の仏像や仏画にはきわめて強烈な刺激を与えるものが多い。なかでも男女交合歓喜仏は他宗派ではあまり見られないもので、観光にくる中国人もこの仏像だ

けは熱心に見るようで、いつも人だかりがしているという。

雍知宮を辞してショッピングをしてホテルに戻ると、嘉木揚凱朝師がロビーで待っていた。彼は、手製の絹布をタオルぐらいの長さに切つて、理事長と私にそれぞれ捧呈してくれた。長上に対する礼儀だという。雍和宮の住持と管家から許しを得て参上したのだといい、晴々とした表情だった。

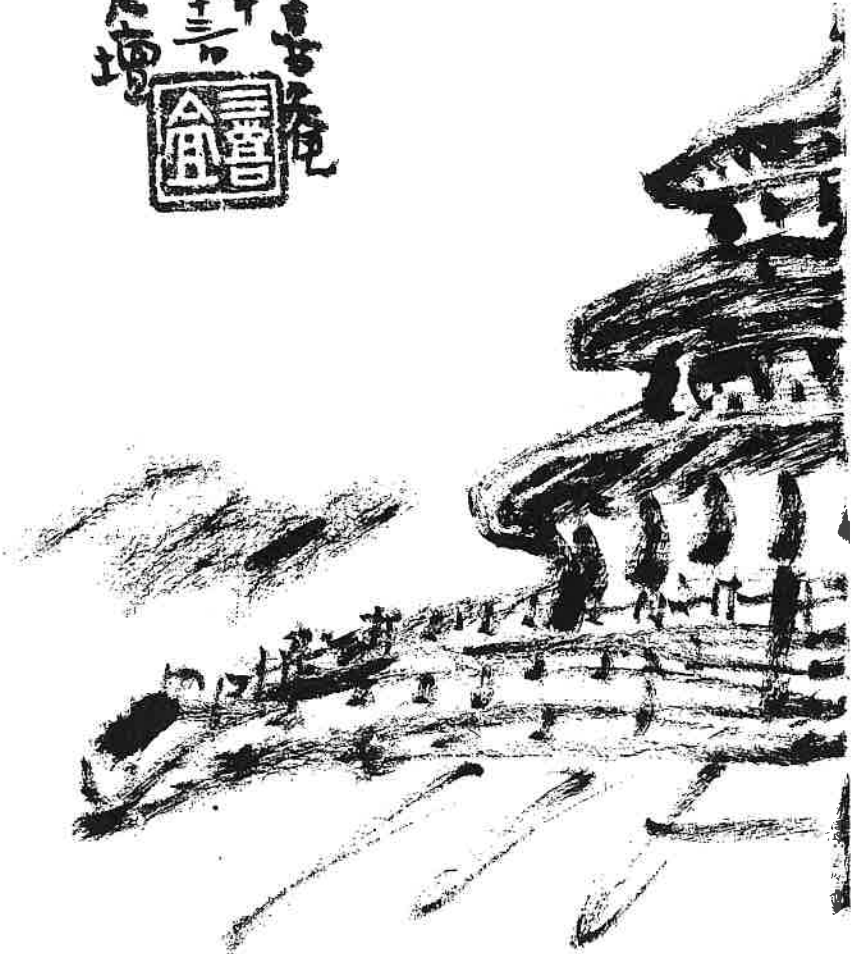
「台北から林夫人が到着したらいっしょに話し合おう」ということで、林淑貞さんの到着を待つことにした。

話は三年前に遡る。台北大学での善光寺留学僧育英会の話を伝え聞いた林淑貞さんが、北京の雍和宮で修行中のラマ僧嘉木揚凱朝師を日本に留学させたいと考えるようになり、一年ほど前から事務局に連絡をとって来た。

林夫人は当初、善光寺留学僧育英会に頼めば



一九八〇年
十二月十三日
北京
天壇
畫



万事を処理してくれるものと考えたらしかつたので、そういうわけにはいかぬ、入国手続や身許保証、育英金でまかない切れない分の学資負担等に責任を持つてもらわなくては採用はできないと連絡したのだが、言葉の障壁があつてなかなかその意が通じない。そうこうするうち、北京の本人からは応募に必要な書類が送られて来て、審査の結果理事会もパスして採用決定となり、愛知学院大学からは聴講許可証が送られて来たが、肝心のスポンサー林夫人からはなんの連絡もない。さればといつていつまでも放置するわけにもいかず、北京に出かけるから、それに合わせて台北から北京に飛来するよう要請し、三者会談が実現したわけ。さいわい李さんの実に素晴らしい語学力のおかげで話は首尾よくまとまり、嘉木揚凱朝師は九月以降愛知学院大学に入学の見込みとなった。

愛知学院大学といえは、小出院長は顧問であ



り、それに助教の引田弘道師は第五回留学僧としてオックスフォードに学んだ新進気鋭の学者で、嘉木揚凱朝師はじめ、今年度の留学僧スリランカのキリメティヤネ・ヴィマラワンサ師などの受け入れに親身になって協力してくださいっていることを一言付記する。

北京滞在第二日は、仕事終つての気楽な観光となつたのでまず最初に中日友好病院を訪れることにした。この病院は、留学僧育英会の顧問伊藤喜三郎先生の設計になるものだからである。ガイド・ブックにも「北京で病気になるものだから、まず迷わずに中日友好医院へ……」と書いてあり、また李さんの話によると、この病院が出来たことによつて中日友好の気運が一段と高まつたとのことであり、李さんの関係するK製作所の重役もここで開腹手術を受け、すっかり健康を回復して目下元気で活躍しているとのことだったが、縁とは不思議なもので帰国の飛行機の

中でその重役の阿部さんといっしょだった。

北京といえば万里の長城。北京の北へ約七〇キロの山岳部、八達嶺からその尾根に沿つて延々と続く万里の長城は、月から見える唯一の人工建造物だという。渤海湾（山海関）から遠くゴビの砂漠（嘉峪関）まで数千キロの長い長い城壁。これは紀元前五世紀以来、各地方の国々が北方の匈奴の侵入に対して防壁として造つたもので、それを秦の始皇帝がつなぎ合わせたものだという。

秦の始皇帝といえば残虐な専制君主で、古典を焼き捨てるなどしたが、反面、通貨や文字を統一し、道路を造成し、万里の長城を築き、分裂していた中国の諸侯や諸部族を統一するなど古来稀にみる力量を發揮した大君主であり、また死後の永遠の棲み家として巨大な陵を造り、実物大の兵馬俑、近衛軍団を造り、それが二千年後の今日発掘されつつあり、そのスケールの

大きな生涯はまだ評価しきれないところであ
ろう。

帰 国 六月二十二日

今回の中国旅行の目的はすでにおわりのよ
うに、

一、天童寺拝観と住持明暘法師を名誉顧問に推
戴すること。

二、杭州浄慈寺拝観と如浄禅師の墓前に詣でる
こと。

三、北京雍和宮で修行中のラマ僧嘉木揚凱朝師
を留学僧として受け入れるについての最後の詰
めをおこなうこと。

の三点だった。

いずれも首尾よく目的を達成することができ
た。

今回の旅行の成功は李幼麟さんの語学力、人
脈、そして人柄に負うことがきわめて大で、善

光寺留学僧がその力量を育英会のために発揮し
てくれた最初の成功例というべく、これは善光
寺留学僧育英会としての画期的な成果だった。

◇六問のこたえ◇

- 1、ロサンゼルス
- 2、サンフランシスコ
- 3、シドニー
- 4、ファッション・ショウ
- 5、スプライト
- 6、カラーフィルム